

次に唾液腺シンチでは、その集積の pattern を normal, enlargement, defect, decreased uptake, non-visualized の5型に分類し、腫瘍の悪性、良性との相関を検討したところ、症例数は少ないが悪性腫瘍では、decreased uptake, non-visualized の所見を示す傾向にあり、また、良性腫瘍では、normal, defect の所見を示す傾向にあるように思われる。

また、CT スキャンでは、第一世代 ACTA スキャンによるものであるが、耳下腺の腫脹、石灰化などの所見は認められるものの、CT 上悪性、良性の鑑別は困難であった。現在、われわれは、第三世代 GECT/T8800 を用いて、頭頸部腫瘍の診断にも役立っているが、耳下腺疾患に関しても、造影剤の大量早期点滴法を併用するなどの工夫によって、より詳細な検討ができるのではないかと期待している。

8. 肝腫瘍に対するタリウム 201 の集積の検討

高橋 弘
(磐城共立・放)

肝腫瘍の質的イメージ診断法として、 $^{201}\text{Tl-chloride}$ を使用したので、その結果をここに報告する。

検討の対象は、昭和54年5月から8月まで、 $^{99\text{m}}\text{Tc-phytate}$ 肝シンチグラムで、cold lesion を示した30例で、その内訳は肝細胞癌8例（肝硬変合併7例、非合併1例）、肝硬変偽腫瘍16例、転移性肝癌5例（胃癌4例、子宮癌1例）、肝のう胞症1例であった。

シンチグラムは $^{201}\text{Tl-chloride}$ 2 mCi を静注し、5分後から scanning し、正面、背面、両側面像を撮影した。また、スキャンナーのエネルギーウィンドウは、k-X 線を利用する場合は、65~82 keV とし、 γ 線の場合は126~176 keV とした。

最初の6例は、k-X 線によったが、肝細胞癌の1例で、k-X 線では陽性像がえられず、 γ 線の利用で陽性像がえられた症例を経験してからは、 γ

線に合わせたエネルギーウィンドウとした。病巣部への $^{201}\text{Tl-chloride}$ の集積が、その周囲組織より強い摂取を示したものを陽性、その他を陰性とする、肝細胞癌では8例中6例に陽性、肝硬変偽腫瘍では16例中15例が陰性、転移性肝癌5例、胆のう胞症1例はすべて陰性であった。

以上の結果から、 $^{201}\text{Tl-chloride}$ によると、肝腫瘍例から肝細胞癌例の鑑別率は高いように思われた。Cox は肝癌の1例、実験的に Rat の Rhabdomyosarcoma に $^{201}\text{Tl-chloride}$ の集積を報告し、久田は肝細胞癌7例中5例に、中島は肝細胞癌の5例すべてに陽性像がえられたと報告し、 $^{201}\text{Tl-chloride}$ 集積機序を細胞膜の透過性の亢進と vascularity と推定している。しかし、伊藤は、 $^{201}\text{Tl-chloride}$ は K 代謝と同じと報告し、腫瘍親和性に否定的であるが、今回のわれわれの検討では、本例の肝細胞癌への腫瘍親和性を全く否定できず、臨床上、 ^{75}Se -セレンノナチオン肝シンチグラムと比較し、被曝線量の軽減がえられるとの文献的報告、また、 $^{67}\text{Ga-citrate}$ に比し、使用上の煩雑さが少ないなどを考慮すれば、手軽に利用できるため、今後さらに、症例を重ねて検討したいと考えている。

9. 振動障害者の骨変化における核医学的イメージングの観察

木田 利之 鈴木 晃
小林 克子 加藤 和夫
(福島医大・放)
成田 滋
(成田・内)

研究目的：振動障害者は振動に関係の深い部位すなわち、頸椎および上肢の諸関節にいろいろな骨変化をきたすことが知られている。振動障害者に全身骨シンチグラフィーを行ない、その骨シンチグラム所見および診断的意義について検討した結果を報告する。

対象、方法：対象は某製鋼工場の振動工具使用